

三井住友建設株式会社 2022年3月期 第2四半期決算説明会  
主な質疑応答

1. 上期業績について

Q 大型工事の損失 206 億円については、工事の赤字額か、それとも今回見直した額か。感染症の影響などがあっても、なぜここまで損失が膨らんだのか。

A 個別工事については、発注者との関係上、詳細な回答は差し控えさせていただくが、今回損失（206 億円）は、当該工事の最終原価を見直した結果、大幅に増加する見込みとなり、工事損失引当金繰入額を含め、会計上処理した赤字額である。

原因としては、非常に難易度の高い工事で、発注者様と今後の詳細な工法等について協議した結果、当初の想定より大幅に原価が増加する見込みとなったものである。

なお、今回の損失処理により、当該工事に関する追加損失は発生しないものと考えている。

Q 受注時の見積りや施工体制などに反省すべき点はなかったか。

A 社内の受注基準はクリアしていたが、実際に工事が進捗するなか、様々な問題をクリアしていく過程で想定外の費用が発生した。今から考えると、当初の見通しに甘い部分もあり、大型工事に対する受注管理、現場管理体制の一層の強化を実行していく。

Q 他社では、戦略受注として赤字で受注するケースもあるが、今回の大型工事について、そのような考え方はなかったのか。

A 当初から赤字を想定したものではない。初めての顧客や新しい工種など、若干採算を下げて取り組むことはあるが、最低でも経費率を上回る水準でなければ受注しない。

2. 通期業績予想の修正について

Q 修正後の通期予想から上期を差し引くと、下期の建築利益率は5%程度になるが、大型工事の損失を除外した状況はどうか。同業他社の採算を見ても、少しずつ厳しくなっていると認識しているが、来期以降の業績を考える上でも、下期の利益率が低位で推移する理由を伺いたい。

A 当該工事については、工事損失引当金を計上しているため、工事の進捗とともに、完成工事高は計上されるものの、当面、利益には貢献せず、建築全体の利益率は抑えられることになる。

また、期首予想における利益算定においては、当期受注、当期完工の利益に一定のウエイトを置いたが、コロナ禍による受注時期の遅れなどもあり、今回の業績予想については、再度下振れすることがない水準で見直したものとご理解いただきたい。

Q 大型工事の影響で、建築利益率は暫く、苦戦するということか。

A 当該工事の影響は今後も続くため、決算上の全体利益率は抑えられるが、大型工事の損失を除外すれば、上期の建築利益率は8~9%程度を確保している状況である。

- Q 今後、大型工事に関する損失がさらに拡大するリスクはあるか。また、損失を縮小することは考えているか。
- A 当該工事の損失が拡大することはないと認識している。今後、様々な工夫を重ね、発注者様とも協議しつつ、少しでも挽回できるように努めていく。

### 3. 財政状態、株主還元

- Q 今まで順調に改善してきた財務体質が一旦悪化するが、現状の財務体質について、どのように考えているのか。また、今後の株主還元に関する考え方を伺いたい。
- A 2021年9月末の連結自己資本（885億円）については、約2年前と同水準である。今回の損失はあくまでも一過性のものと考えており、この要因を除外すれば、建築の利益水準は期首の想定より若干下がった程度である。
- 大型工事の損失を除外すれば、全体の利益確保が可能であった点も踏まえ、格付機関の当社格付は「据置」となったものと考えており、当社の信用状況は、従来と大きく変化していない。
- また、今回毀損した自己資本については、今後2年以内に回復可能と考えており、今後の株主還元や将来に向けた成長投資に関する基本的な取り組み姿勢は、従来と変わらない。

以上